
世界樹の葉

赤城康彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹の葉

【Nコード】

N8003S

【作者名】

赤城康彦

【あらすじ】

八末広はちまろはKawasaki D-Tracker を愛機こころにバイクの青春を謳歌する高校二年生。それがどういうわけか、異世界の戦いに巻き込まれ、ラノベよろしく異世界に召喚される。しかし、持ち前の明るさと闘争心で、アクセルを開けて、風を抜け！ 元気だけがとりえの青春異世界召喚ファンタジー小説。

episode 1 出会い

梅雨が明け、初夏の日差しがまぶしい日曜の朝。
八末家の隣の家に、若い夫婦と十歳の男の子の家族が引っ越して
きた。

トラックから家財をせっせと運び出す様を見て、白いＴシャツも
まぶしい八末家の長男、八末広は、

「こんにちは、隣の八末です！ 引越しの作業、手伝いますよ！」
と進んで手伝いを買って出た。

屈託ない笑顔の、活発な十七歳のヒロシを見て、

「ああ、お構いなく。気持ちだけで十分ですよ」

Ｔシャツにジーパンで作業する、普通の三十路サラリーマン男
性なご主人の松江豊は荷物運びながら、ヒロシの好意に感謝しつ
つ、丁寧に断りを入れた。

「え、でも、大変でしょう？」

「いえいえ、本当にお構いなく」

おしとやかなアラサー女性って感じの奥さん、寿子も、好意に感
謝しつつ、丁寧に断ってくる。が、そのそばでちよるちよるする男
の子、春人はヒロシをぱっちりした目で見つめると、

「じゃあさ、僕と遊んでよ！」

とひよこひよこよってくる。

「こら、余計なことしないでお手伝いしなさい」

「そうよ、いい子だから。お兄ちゃんに迷惑をかけちゃだめ」

(別に迷惑じゃないけどなあ……)

余計なでしゃばりをしちゃったか、とヒロシはなんとなくばつが
悪い。

「ああ、あとでご挨拶にうかがいますから。そのときに改めて」

豊は苦笑しながら言った。春人はちよつと、しゅんとして寿子の
そばまでゆき、渡された自分の漫画本を運ぶ。

ヒロシは春人の背中を微笑ましく見つめて、

「どうも、お邪魔しました。すいません」

とその場を後にする、と。

「ばいばいお兄ちゃん、またね」

と春人は手を振り、ヒロシも応えて手を振った。

「あー、やんわり断られちゃったよ、はずかしー」

いつもそうだ。お人よしのでしゃばりな性格のため、恥ずかしい
思いをすることは一度や二度ではなかった。で、今日もそうだった。

家に戻ったヒロシは二階の自分の部屋にゆく。

高校二年生の男子の部屋らしく、よく読む漫画やライトノベルや、
GTといったプレステのソフトが散らばっていた。

机の上には、勉強のための筆記用具でなく、手の甲部分にガード
のある分厚い手袋と黒いヘルメットと赤いバンダナと、鍵が無造作
に置かれている。それに目をやると、椅子にかけてあるジャケット
を手に取り身にまとう。

そのジャケットは、背中に十字のマークのあるイエローコーンの
ライダーズジャケットだった。

「うっっ」

びしっと襟をととのえると、まずバンダナを手に取り首に巻いた。
それから、黒いヘルメットの中に手袋をつめこみ、鍵を手に取り、
たたた、と階段を駆け下り、玄関の靴箱から太いエルフライディン
グシューズを出して履き、庭に出る。

庭にある駐車場の片隅に、ライムグリーンのオートバイがあった。
オフロードバイクにオンロードタイヤを履かせたモタードというカ
テゴリのバイクだ。

Kawasaki D-Tracker^{トラッカー}。

ヒロシはこぼれる笑顔でD-トラッカーにキーをさし、セルスイ
ッチを押した。

きゅるる、どるるるっん、とD-トラッカーは目覚めの息吹をあ

げた。

両手でハンドルを握りしめ、右ハンドルのアクセルをひねれば、D・トラッカーは、いよう、と呼びかけるように少し咆えた。

「ま、今日も元氣いっぱい走ってきましようかね」

ヘルメットを被り、手袋、グローブをはめ、ぽそつとつぶやくと、左手で黒っぽいスモークシールドを閉じる。このスモークシールドは直射日光や紫外線からライダーの目を守るバイクのサングラスとしたものだ。

景色は一瞬にして影がかかったように見える。このスモークシールドを閉じると、やる気が出てわくわくする。

左手でクラッチを握り、左足でギアを一速に入れ、アクセルを開け、さあ、いくか、と駐車場を出ようとした。

そのとき、

「かつこいいい！」

春人だ。ひよっこり壁から顔を出して、にこにこことヒロシとD・トラッカーを見つめていた。

ヒロシの家で何か音がしたので、なんだろと思って来てみたら、仮面ライダーがいた！

春人は嬉しそうにD・トラッカーのもとまでひよこひよここと歩み寄る。

「あ、こら、危ないぞ」

幸い走り出す前だったからよかったが、もしタイミングが悪くてぶつかったら、と思うとぞつとする。

「ねえねえ、お兄ちゃんでしょ、かつこいいねえ」

春人はにこにこして、今にもヒロシの足にしがみつきそうな近さまでよってきて、穴があきそうなほど、D・トラッカーとライダーズスタイルで決めたヒロシを見つめていた。

子供が近くにいるのは、危なくてスタートできない。

「こめんよ、オレこれからでかけるんだ。危ないから離れて、おうちに帰りなよ」

と言うも、聞こえていないのか聞いていないのか、春人はまじまじとD・トラックとヒロシを見つめていた。

(まいったなあ)

一旦バイクを降りてこの子を家に送ろうか、と思ったとき、

「すみません、うちの子が迷惑をかけて」

とお母さんの寿子が平謝りしつつ、春人の手を取り、しきりに頭を下げ引張ってゆく。

「ああ、いいですよ。怒らないであげてください」

「すみません、すみません」

お母さんは子供の手を引きながらお辞儀をして、家に戻っていった。それを見届けると、

「ふう」

と大きく息を吐いて、気を取り直し、注意深く駐車場を出て、D・トラックのアクセルをひねりいい音させて街を駆け抜けていった。

episode 2 風を抜け！

太陽も木々の緑もまぶしい。蒸し暑さも走り出せば丁度いい心地よさだ。

ヒロシとD・トラッカーは街を抜け北の山の山道に入った。峠道にはいれば通行量は少なくなり、いい感じで流せる。とともに、風がヒロシとD・トラッカーを出迎えるように吹き付けてくる。

上り坂、登坂車線もつけられるほどの急坂だ。坂の上では青空が広がり、雲が心地よく空を泳いでいる。

機嫌よくさえずっていたD・トラッカーのアクセルを開けて、カタパルトから飛び出し坂の上の雲にでも突っ込むかのように「愛機」を加速させた。

D・トラッカーは叫び後輪を蹴って駆け、景色は吹っ飛ぶように流れ、加速するにしたがい重心が後ろへ移り前輪は浮きあがりそうになる。

が、ここでは前輪を浮かせず一瞬アクセルを戻し前輪を接地させてからまたアクセルを開け、加速する。

風が一気にヒロシとD・トラッカーにぶつかってくる。人車一体となつて、風を打ち砕いてゆく。

風を抜け！

そう叫ぶように空を打つD・トラッカーのエキゾーストノートが峠に響く。

道路の車線も車輪の回転早まるにしたがい途切れ途切れなのが、一本になったように見えた。

登坂車線が終わるとともに、上り坂も終り、フラットな直線。

いまこそ、とヒロシはアクセルを開けて重心を後ろに移し前の重心を軽やかにすれば、D・トラッカーは前輪を高々と上げて、ウィリーをかます。

「ひいーいーやっはーいーいー！」

それこそ空に飛び立つかのごとく前輪を上げるD・トラッカー視界に広がる青空を眺め、ヘルメットの中でマシンとともに叫ぶ。

このD・トラッカーは初期型でカスタムがほどこされマフラーにサスペンションが交換され、ハンドルの前にはこぶしを保護するナツクルガードが装着。ミラーは丸かったのを角ミラーに換えてある。初期型の中古を必死の思いでしたアルバイトで稼いで買った。買ってからも維持のために月曜から金曜の放課後ファミレスでアルバイトをしている。

D・トラッカーは愛機であるというだけでない、ヒロシの全てだった。

ガキのころ道ゆくバイクを見て、

「かつこいい！」

と稲妻がほとばしるような衝撃を受けて、以来バイクの虜となり、免許を取りD・トラッカーを手に入れ、風となり風を抜くことが、ヒロシの全てだった。

峠道は隣の県へ通じる国道でもあり、よく整備されて走りやすかった。

しばらく右に左にコーナーを楽しむ走りをしていると、脇道が見えた。その脇道へと滑り込む。

寄り道、ではない、この脇道からがヒロシとD・トラッカーの本領発揮だった。

国道を外れると一気に森の中の道になる。木々の影があたりを覆い、時折木漏れ日が槍のように道に突き立つ。

道路状況は国道と変わらないが、ヘアピンコーナーが増えてスピードはどうしても落ちるが、ひらひらと森から突き立つ木漏れ日を突き破りながら右に左にD・トラッカーは突っ走ってゆく。

ヒロシのライディングテクニックも悪くない。アウトインアウト、スローインファーストアウトの基本を守りながらも臨機応援に状況に対応し、D・トラッカーを身体の一部のように操る。

走るにつれて道幅は狭まってゆき、ついには一車線路になってしまった。道路状況も悪くなり、落ち葉が道を埋めひどいところではアスファルトが剥がれて水溜りが出来ている箇所もあった。

しかも片方はガードレールがない崖、片方は草木生い茂る山肌で、時折山が崩れ土砂が道の半分に雪崩れ込んでいたりしていた。落石もこころ転がっている。

この道は国道が出来る前に使われていた旧道だった。今は使う人は少なく、整備状況も悪く、寂しい道だ。が、そのおかげで冒険心をくすぐるアドベンチャーロードとして楽しめた。

快晴にもかかわらず、森の中のためライトがうすく山肌や森の木々を照らし出し、メーターもほんのりと光る。

さつきと打って変わり平均速度は30キロのスローペースだが集中して走らないと落ち葉に足元をすくわれ、下手をすれば崖下転落と、危険と隣りあわせだった。でもその危険と隣りあわせという、ワンミス命取りの緊張感が面白かった。

初めて来たときはどこに通じているのかわからず、今どこにいるかもわからず、まるで異世界に迷い込んだようだった。

今でこそこの道のことを知っているので楽しいが、最初は素直に楽しめず怖い半分だった。

しばらく走っていると道は二股にわかれ、ヒロシは左側に進んだ。森の中はかわらないが、道路状況は突然よくなり、道幅も広くなつた。

軽く流すと、頭上に高架の高速道路を見上げ、太い鉄骨の橋げたがゲートのように道にそびえ高速道路を支えていた。

道は山間を縫うように右に左にうねる。右に左に人車一体となつてコーナーを駆け抜ける。

やがて行き止まりとなつた。

「今日はまだ誰も来てないのか」

一番乗りだ。

「貸切、かな」

にこやかに言うと、行き止まりでＵターンしアクセルを開けてD・トラッカーを加速させ、コーナーを攻めだした。

この道は頭上を走る高架の高速道路の工事用道路だった。今は誰も使わず、ヒロシと仲間たちらモタード乗りの絶好の遊び場だった。「うっはぁー！」

楽しさのあまり叫び、ウィリーをかます。

コーナーが来れば前輪を降ろしヒロシはロードスポーツモデルよろしくハングオン（正式にはハングオフ）スタイルでケツを右に左に移動させつつ、膝を路面にすらないギリギリのところまで突き出しD・トラッカーを走らせていた。

勢いが乗る。

D・トラッカーは唸りを上げ、勢いに任せて後輪をスライドさせ逆ハン切りながら、ドリフトでコーナーを抜けた。

コーナー手前、リアブレーキを強くかけてわざと後輪をロックさせれば、D・トラッカーのケツはふらふらと右左に揺れて、そこから一気に倒しこまれマシンサウンドとタイヤのスキール音双方をこだまさせた。

ドリフトは四輪の専売特許ではない。二輪でもドリフトを楽しむ、ネジの飛んだヤツはごまんという。

ヒロシもそんなヤツの一人で、愛機とともに風を抜くことに夢中になっていた。

episode 3 遭遇

山の中のくねくね道を駆け抜けるライムグリーンの風。

神経は研ぎ澄まされ、マシンと知らず知らずリンクし、アクセルを開けるのは人がマシンか。という境地にまで達した、ように思われた。

仲間はまだ来ていないのでコースは貸切状態。

飛ばし放題だった。

勢いに乗って風を抜き駆け抜ける、というとき、山の茂みから黒い陰が飛び出すように見えた。

「なんだ！」

慌ててブレーキをかけ暴れるD・トラッカーをコントロールし、どうにか止まった。

と同時に目の前を一陣の風が駆け抜け黒い影が目の前に現れた。

「女！」

思わず声が出る。

それは奇妙なものだった。

卍の形をした物体が宙に浮いて、その上には女が乗っていた。

何かの見間違いか、と思えば目をこらしそれを見直す。

しかし、

「うそだろう！」

と叫んでしまった。

それは確かに卍の形をしており、その上には確かに女が乗っている。目の前を駆け抜けた、と思ったらこちらに戻ってきて、ヒロシの前に立ちはだかっていた。

女はプラチナブロードのショートで、サングラスをかけていた。

細くも引き締まり、かつ柔らかなラインを描く肢体は膨らみを見せる黒いシャツの上にジッパの開け放たれた黒いレザーのジャケット、やはりよい膨らみを見せる腰から下はパンツにブーツで決めて

いる。

ついつい、シャツの胸の膨らみや艶のよいレザーパンツのヒップの膨らみに目がいつてしまう。

まるで、無表情、とか、こんな風に生まれちゃった、とか、悪い浪漫、とか歌う洋楽の歌手ばりのスタイルだ。サングラスで目がわからぬといえ、その白く整った顔立ち結構な美人であることが容易に想像できる。

赤い唇が、微笑んでいる。

思わずどきりとした。D-トラッカーは警戒するように唸っている。

しかし、あの、卍の形をしたものはなんだろう。黒漆喰のように艶よく黒光りし、女はそれをスケボーのように乗って立って、左手を腰にあて、右手をだらんとさげて、仁王立ちしている。

というか、目の前のことは、現実なのか夢なのか、現実なのか。と考えていると、スムーズな動きで飛び降りた、と思ったら、うまく腰を卍の形をしたヤツに乗せて、長い足を組んで、左手は卍に乗せて右手は膝の上でのけぞり気味になってヒロシを見つめる。

足は路面から少しくらいのところまで浮いている。

顔はあいかわらず不敵な笑みをたたえている。

(逃げよう)

はっ、と閃く。

しかし、

「怖がらなくてもいいのよ、ぼっや」

と言い出す。日本語だ！ そのまま、Hi guysとか英語喋りそんな感じなのに。

「な、何モンなんだ、あんた」

「私？ ふふ、謎の女、とでもしておいて」

ヒロシの問いに真面目答えず受け流して、一瞬座ったままハイキックするかのようなオーバーアクションで足を組みなおす。これがスカートだったが中が見えていたところだ。

「私、この世界に来たばかりだから、ひとりぼっちでね。あなたに友達になっ**て**ほしいの」

見える、聞こえる。これは幻を見て、幻聴を聞いているのだろうか。

だが言**つ**てる**こ**とが意味不明だ。

ヒロシも多感な時期だから、気を抜けば胸の中に飛び込んでいきそうな衝動が湧いたが、必死でそれを抑えていた。

ハンドルを握りしめながらも、D・トラッカーの鼓動を忘れようとしていた。

という時、不意に右手がビクンと動きアクセルをひねった。D・トラッカーは叫んだ。

「起きろ！」

と愛機に叩き起こされたようだった。

ヒロシは思いつきりアクセルを吹かし、女の横を駆け抜けた。

女は振り返りヒロシの背中を微笑んで見つめて、遠ざかるD・トラッカーの空を打つようなエキゾーストノートを聞き入っていた。

episode 4 挨拶

これ以上はない、というくらい飛ばした。

振り切れた、それとも追ってこなかったのか。女はいない。

が、走っている間の記憶がない。でも何度もミラーを覗いたことは覚えている。

気がつけば、帰りにいつも寄っているコンビニの駐車場にいた。

「ふう」

大きく息を吐き、ヘルメットを脱ぐ。

じと、っと顔の肌が汗で湿っているのが、風にさらされ涼しく感じる。

右のミラーにヘルメットをかけ。グローブを脱ぎ、ヘルメットに突っ込みシールドを閉めて挟む。

喉が渴いていた。

コンビニに入り、ドリンクコーナーにゆく。

ドリンクコーナーには、様々なエナジードリンクがあった。

青地に赤い牛が描かれた赤牛王。

メタリックシルバーの地にゴールドの星が描かれたメタル・スター。

黒地に緑色の怪物の手がピースサインをしているのが描かれた怪物飲料。

黒地に白墨の墨痕鮮やかな行書体の力強い筆遣いでふとぶとと、
容赦なく注入、と描かれた容赦なく注入ドリンク。

などなど……。

ヒロシはエナジードリンクが好物だった。

その中で怪物飲料が好きなのでそれを手に取り、危うくそのまま
タブをあげようとして、はっとして慌ててレジにもってゆき支払い
を済ませ、外に出てD・トラッカーのシートにもたれかけて買った
怪物飲料を飲んだ。

冷たい炭酸ドリンクが喉をすべってゆく。

「ふう」

と大きく息を吐いた。

と、ふとコンビニの自動ドアが開いて黒い影が動いた、と思った
ら。

「……！」

あの女が出てきた。右手には「容赦なく注入」ドリンクを持っている。

それからさらに、絶句。

女の後ろに、男が三人ついてくる。それらは、ヒロシのバイク仲間だった。

みんなにこにこして、女の後ろを着いてゆく。手にはそれぞれ、赤牛王やメタル・スターなどのエナジードリンクを持っている。

「あう」

声をかけようとしたが、できなかった。

様子がおかしい。仲間たちはヒロシに目もくれず、愛想笑いを浮かべて女のご機嫌うかがいばかりしている。

が、女は。

黒いサングラスのレンズが、ヒロシを映し出す。

にこりと微笑み、空いた左手の親指と人差し指と小指を立てて、ヒロシにハローと言いたげに見せつけた。

ヒロシは嬉しくない。けったくそ悪くなって、さっさと怪物飲料を飲み干して、さっさとバイク走らせてコンビニを後にした。

陽はまだ高いが、走る気が失せて家に戻った。

松江一家はもう引越し作業が終わってか、家の前にはトラックがなく、作業する一家三人の姿は見かけられない。

（あれ、もう終わった？）

引越しの荷物の運び出しは半日で終わるものだろうか。と思ったが、よその家のことをああたこうだと考える気力は今はなく、駐車

場に滑り込むとさつさと自分の部屋にゆき、さつさとヘルメットとバンドナとグローブを机において、ジャケットを脱いでベッドに飛び込み、そのまま寝た。

晩方、母親にたたき起こされて、晩飯にしようかというとき。インターホンが鳴った。

母親に出ると言われてめんどくさいながらも出れば、松江一家だった。

「こんばんは、松江です。ああ、今朝はどうも」

豊が愛想よく挨拶をする。

その隣には奥さんの寿子。その間には春人。

「ああ、どうも、わざわざご親切に……。ちょっと待ってください」と、母親と父親を呼び、一家それぞれが自己紹介をした。

松江一家は転勤で隣の県から引っ越してきた、という。

「これからよろしくお願ひします」

「いーえ、こちらこそ」

両親は愛想よく松江一家にお辞儀を返している。春人は、ヒロシをじっと見つめていた。

「僕おつきくなったら、お兄ちゃんみたいにバイク乗るんだ！」

などと、元気よく宣言する。ヒロシは驚き、両家の両親は大笑いだ。

「え、ああ、そうなんだ。がんばれよ」

「うん！」

春人は満面の笑みで、力強くうなづいた。その笑顔のうちに、颯爽と風となって走るバイクのイメージが描かれているのは、容易に想像できた。

episode 5 異変

「いつてきまーす！」

翌日、ヒロシは赤い、サスペンション付きのMTBを飛ばして登校する。

このMTB、本格的なヤツではなく、ホームセンターで売られている二万円弱のもので、いわば見た目だけだ。ヒロシは自転車にはバイクほどの強いこだわりはないようだが、それでも乗るならカッコいいヤツがいいに決まっている。

本格的サイクリストはホームセンターの自転車を否定するが、ヒロシから見ればリア充が非リア充を馬鹿にしているようにしか見えなかった。

それはさておき。

ギアも入りづらく、ギアの入れようによってチェーンもがちゃがちゃ鳴って、ペダルをこいでも速度は上がらない。

やっぱり見た目だけ、だけど自転車としては十分使えるし安いし、とペダルをこいで学校を目指して走れば、

「おはよー！」

という元気のよい声。

春人だった。通勤中の豊に手を引かれながら、小学校に向かっている。

「おーう！ おはよー！」

ヒロシも元気よく応え、自転車をこぎつつ豊に頭を下げ、左手を上げて駆け抜けてゆく。

春人は駆け抜ける一陣の風に、目を輝かせていた。

高校に着く。ヒロシの通う子守歌町の子守歌高校は赤点の成績さえ取らなければバイクの免許はとってでもいいが、通学は禁止されていた。だから自転車通学だ。

よーうとかおはよーとか挨拶を交わしながら、生徒がぞろぞろと校門をくぐってゆく。

なんでもない、いつもの光景。

そのいつもの光景の中にもぐりこみ、自転車置き場に自転車を置いて。かばんをかついで教室まで、とことこ歩く。

教室に入ると、バイク仲間でありクラスメートの赤田康隆あかた・やすたかが、自分の席について、ぼけーと黒板を眺めているのが目に入った。

ヤスタカのやつは気が弱いくせに自分を強く見せようとする見栄っ張りなところがあり、ヒロシをみかけると、おうおう、と兄貴ぶって声をかけてくるのだが、今日はなぜか無反応で黒板をじっとながめていた。

(ヤスタカのヤツ、どうしたんだ)

昨日だって、あの女の後ろで鼻の下を伸ばしてでれでれしていたのを見た。さすがに人違いだと思いたかったが、どうも当人らしい。

「よう、昨日はどうしたってんだ。あの女は誰だ、知り合いなのか」
ヒロシはヤスタカのもとまで歩み寄って、話を聞きだそうとしたが、ヤスタカのヤツは死んだ魚の様な目をして、ヒロシを見据え。

「え、なんのことだ？」

と言うのみ。明らかに様子がおかしい。ヤツの性格を考えれば、あの女のことを嬉々として話しそうなものなのに。

「いや、なんでもねえ」

不気味なものを感じて、自分の席に着いた。

初夏だというのに、なぜか薄ら寒い。

他のクラスの連中も、ヤスタカの様子がおかしいことに気づいて近づかず、「きもい」を連発していた。が、ヤスタカは気にする様子もない。

別にヤスタカはいじめられっこでもないし、ましてやいじめっこでもなく、なんだかんだでクラスに馴染んでやってきていたが、今日は違う。

しばらくしてチャイムが鳴って、ホームルームがはじまった。

先生が入ってくる、がいつもの担任の先生ではなく、教頭が若い女性教師を連れて入ってきた。

クラスのみんなは喚声を上げた。

その女の先生、髪はプラチナブロンドのショートで肌も白く、明らかに外国人だった。それだけでも驚きものなのに、なんとその目は、右はブラウン、左はアイズブルーの、オッドアイときたもんだ。「お、おおー、ヘテロクロミアだ」

と、好きなSF小説の言葉で女性教師のオッドアイに驚きを示すオタク生徒。なにより、一言で言えば、まさにクール。そんな美人が紺色のスーツで決めて目の前に現れれば、誰だって驚き息を呑む。見よ、男子生徒も女子生徒も、教頭も、ときどきしている。

「えー、担任の長宗我部先生はご不幸があり実家の高知県に急遽帰ることになりました……。戻ってくるまでの間に、新任の萌島先生もえしま、れいかにこのクラスを担当してもらおうことになりました」

「萌島麗華もえしま、れいかです。よろしく……」

萌島先生は手短かに挨拶して、丁寧にお辞儀をした。てっきりパリとかベツキーとか、外国の女性名が出てくると思っていたが、日本の名前だったのは拍子抜けだ。

「私は父が日本人で母がアメリカ人のハーフです。科目は英語を担当しています。短い間ですが、頑張ります」

ときどきする生徒たちや教頭をよそ目に落ち着き払って、淡々と萌島先生は挨拶を済ませた。

episode 6 四面楚歌

ヒロシは萌島先生に何かひっかかるものを感じていた。ふと、ちらりとヤスタカを横目で見た。

ヤスタカのヤツは、あるうことか、死んだ魚の目から一転して目をきらきら輝かせながら、鼻の下をでれーと伸ばしまくっていた。その顔はなんとも助平丸出しでいやらしい。

「……！」

歯を食いしばり、確信が持てた。萌島先生は2Fフリスビーのあの女だ！

これはどういうことだ、と疑問もあるが、萌島先生があの女だということとは確信できる。

しかしオツドアイだったとは。あの時はサングラスをしていたから、目の色がわからなかった。

不意に萌島先生は落ち着き払った顔から一転して笑顔を見せた。クラスみんなは、直射日光でも見るかのようにまぶしそうだ。

その笑顔が、ヒロシに向けられた。色違いの瞳がヒロシをとらえる。

「……」

ヒロシ無言。

取り込まれまいと、表情を崩さず、我知らず萌島先生をガン見していた。

すると、四方八方から視線を感じる、

なんとクラスのみんなは、萌島先生にガンつけるヒロシを敵しい目つきで睨んでいた。教頭までもが。

(萌島先生を睨むなんて許せない)

目がそういつている。

(こりゃ、どうしちまったんだ)

なんで女ひとり現れたくらいで、こころも変わるんだ。

別にヒロシは不良気取って教師に反抗しやことはない。むしろ免許を取るために赤点を取るまいと必死に勉強をしたので、長宗我部先生はヒロシのことをよく思ってくれていたし。ヤスタカともども事故に遭わないよう、安全運転を心がけてほしい、と気にかけてくれていた。

おかげでくれそこね、真面目な普通の高校生として高校生活を送れている。

クラスの連中とも別にトラブルもない。

それが、いまは、どうだ。

「先生に反抗するなんて、許せねえな」

おもむろにヤスタカは立ち上がると、ずかずかヒロシのもとまで歩み寄って、その肩をつかんだ。

「立てよこらあ！」

「なにしやる！」

なんとヤスタカは大声でどなりヒロシの肩をつかんで無理矢理引っ張り立たせようとする。ヒロシも思わず言い返し、肩の手を払った。

「先生に謝れ！」

とクラスのみんながわめく。

「そつだ、謝れ！」

「睨みつけてすいませんって、謝るんだ！」

「萌島先生に反抗するなんて、信じられない」

一気に悪者扱いで一人ぼっちにされた。萌島先生は笑顔のまま、教頭はでれつとした顔のまま。

いかにヒロシといえど、これには堪忍袋の緒が切れて、かばんを掴んで教室から出て行った。

「君！ 君はいつからそんな不良になってしまったんだ！ ああ、

バイクなんかにはまると、不良になってしまふのか！」

という心無い教頭の言葉がヒロシの背中にぶつけられる。

バイクのせいじゃねえよ！ と心で言い返しながら、自転車を飛

ばして学校を出た。

家に戻ったが、両親は仕事でいない。
部屋に戻り制服からTシャツとジーパンに着替え、ベッドに横になる。

「なんなんだありゃあ」

思わずぼそつとつぶやく。

様子がおかしいなんてもんじゃない。

まるで昔流行した学園ミステリー or SFみたいじゃないか。
丁度親父が若いころにそんな映画が流行り、映画に出てた女優が大好きで、今もよくビデオテープで見ている。

まさかそれが現実に起ころうとは。

このまま不貞寝ふてねだと思ったが、だが性分なのか起き上がってイエローコーンのジャケットをはおると、バンドナを首に巻いてヘルメットとグローブを引っ掴んで、玄関でエルフのライディングシューズを履いて。

D・トラッカーで走ろうとした。

これがかきつけかけで道を踏み外すだろうか、と思ったが、そのときはそのときだ。

と、D・トラッカーを目覚めさせて、走り出す。

episode 7 危機

平日月曜の街を、D・トラッカーは駆け抜ける。

心の中で嵐が吹き荒ぶ。

どこへゆくでもない、街の中の走りやすい大通りをぐるぐる回る。気の向くままに、右に左に。

信号が赤になる。

急ブレーキ、とくに後輪のブレーキを強くかけてわざとロックさせれば、後輪は回転をとめた状態で泣かせてすべらせて、停止線で停める。

目の前の横断歩道の人々は危なっかしい停まり方をしたヒロシとD・トラッカーに冷ややかな視線を送りながら歩いてゆく。

と、そのとき、プラチナブロンドのスーツの女が目の前に現れた。「えっ！」

その後ろには、クラスメイトたち。あるところか、教頭に、校長までいる。みんな、ヒロシを睨みつけていた。

「学校をさぼるのはよくないわね。不良くん」

萌島先生はオッドアイにヒロシとD・トラッカーを映し出し、微笑んだ。同時に、クラスメイトや教頭、校長はヒロシを取り囲もうとする。

(ヤバイ！)

咄嗟にアクセルを開けてスピンターンし、道路を逆走して逃げた。街の人々は何事だと騒いでいる。

下手をすれば警察沙汰だ。

ヒロシはすぐに脇道に入り、迷路のように入り組んだ路地裏を飛ばして逃げた。

街はヤバイ、郊外に出よう。と、進路を峠道に向けた。

逃げたヒロシとD・トラッカーを見送り。萌島先生はすぐにクラスメイトともども撤収する。顔はどうということもなく微笑んでいる。

た。

「あれ？」

という声。

「おれたち、こんなところで何をしているんだ」

「あたしたち、学校にいたんじゃない……」

「や、や、これはいつたい」

「なんとも奇ツ怪千万……」

クラスメートも教頭も校長も、どうして自分たちが学校ではなく街の中にいるのかわからず、慌てている。

「と、とにかく、学校に戻ろう」

みんな急いで学校に帰った。

萌島先生はいなかった。誰もそのことを気にならなかった。

街を駆け抜け、峠道の上り坂が見えてきたころ、ミラーに映る、オンロードタイヤを履かせたオフロードバイクたち。ブルーのヤマハ・WR250Xにイエローのスズキ・DR-Z400SMに、ヤスタカの黒いホンダ・AX-1。

そして、あの汎リスビー！

「追いかけてくるのか！」

昨日、女の後ろで子分になって着いていた三人の仲間。彼らももう完全に操られているのは間違いない、ヤスタカの様子でいやというほどわかった。

WR250XのコウジとDR-Z400SMのハジメのふたりは社会人なのだが、社会人でも女になにかしらの方法で操られてしまったようだ。

一体どうやって人を操るんだろう。で、ヒロシは操られないで済んだのだろう。

「くそ！」

三台は勢いよく駆けヒロシとD-トラッカーに迫る。

その少し後ろで、女は汎リスビーをゆっくり浮かせて走らせて、

様子見としゃれ込んでいる。

服は学校で見たスーツではなく、昨日見たレザースタイルになり、しっかりサングラスもしている。

社会人のふたりはヤスタカのAX-1を置き去りにグングン迫り、ついに真後ろに着かれた。

ヤスタカは卍フリスビーにも追い抜かれて、最後尾。とともに、急ブレーキをかけて停まり、

「あれー」

と素っ頓狂な声を上げた。

「オレなにやってるんだ。学校は？ え？ え？ え？」

きよるきよるとあたりを見回しパニックっている。今の自分の状況がわからないようだ。

「使えない男ね」

女はヤスタカを一瞥し、それから知らん顔。ヤスタカは仲間うちで一番下手で遅かったから、置いてけぼりを食ってしまった。で、女は見切りをつけたようだ。

社会人のコウジとハジメの、WR250XとDR-Z400SMは、速かった。キャリアもあればテクもある。愛機を手足のごとく操り、ヒロシをとらえて話さない。

卍フリスビーの女も満足そうだ。

排気量とパワーに勝るハジメのDR-Z400SMは上り坂で重さに思いつき逆らい坂をカタパルトにして飛び立つのかと思うほどの勢いでD-トラッカーの前に出た。とともに、急ブレーキ。ブレーキランプが光り、ケツが迫ってくる。

「マジかよー！」

追突させる気か！

ヒロシは慌ててブレーキをかけた。が、後ろにはコウジのWR250Xがいる。と思つたら、ごつんと後ろから突かれる。あろうことか、コウジはWR250Xの前輪でD-トラッカーの後輪を突っ

ついたのだ。

ヒロシはどうか体勢を保ち、急いで右にそれて、前後の二台をかわし、スピンスターでUターンして逃げようとする。

が、Dフリスビーが立ちはだかる。サングラスに映し出されるヒロシとD・トラッカー。

「どけどけどけー！」

威嚇にウィリーをして、思い切って突っ込む。

危険な賭けだが、相手は人間じゃない！

女は、ふふ、と笑い。すっ、とDフリスビーを浮き上がらせて、

D・トラッカーに下をくぐらせた。

それから猛スピードで追いかけて、ヒロシの背中を追った。無論コウジとハジメも追った。

女はうまくDフリスビーの上に立ち、まるでスノボかサーフィンのようにうまくDフリスビーを操って、宙に浮き上がり風を切る。

ついミラーをのぞいてしまったヒロシは、夢のような、まさに悪夢のような展開だった。いったいぜんたい、なにがどうなっているのか。

こんなことがあるわけがない。しかし、いま、現にあるのだ。

それがなぜか、自分に危害を加えようとしていた。

episode 8 異世界召喚

卍フリスビーとWR250X、DR-Z400SMが迫る。ぐんぐん迫る。

もう逃げられないか。

あそこまであからさまに危害を加えようとした以上、つかまったらただではすむまい。

「なんでこんなことに」

悪いことは、そりや確かにスピード違反を楽しんでいるけれども、それは山奥の細道にかぎり、他では安全運転を心がけている。こうして大勢の人間から睨まれ追いかけれ、しかも下手すりや事故るような仕打ちを受けるいわれはないはずだ。

あまりの不条理に泣きたい思いだった。

どうなってしまっんだ、という不安が盛り上がりアクセルを握る手もゆるくなる。

そのときだった。

葉っぱが三枚、目の前を舞った。

それは編隊飛行で風に乗れヘルメットの横を風に吹かれて風に流されてゆく。

女は舌打ちし、スノボを停める要領で卍フリスビーを蹴りあげるように葉っぱに向けた。

葉っぱは卍フリスビーをひらりとかわして後ろに回りこむ。女は振り向き葉っぱを黒いレンズ越しに睨んだ。目は見開かれて、色違いの瞳は燃えるように輝いていた。

「しつこいやつらだね、イスレ、マウリン、イオム！」

女は叫んだ。葉っぱに叫んだ。

すると、三枚の葉っぱは強い光を放ち、なんと人へと姿を変えた。女は忌々しそうに卍フリスビーを止めて、三枚の葉っぱだった三人の人間をサングラス越しに見据えた。

女がとまった。よせばいいのに、なにごとだと気になってヒロシも止まってしまい、振り向いた。で、その視線の先にいる三人。

「……。ああー」

声にならない声で叫んでしまった。なんと三人は松江一家ではないか！

しかも、服装はロールプレイングゲームの白魔術師のような格好で、ますます本格的なことに木の杖までもって。

しかも宙に浮いている！

「観念しろ！ リレントレス・クルーエル！」

と豊は叫び。寿子は咄嗟に振り向き迫ると杖を振りかざすや、

「えい！」

と叫ぶと、DR-Z400SMとWR250Xは動きを止めた。

春人はヒロシが停まったの見て、

「とまっちゃだめ！ 逃げて！」

と無重力にいるようにすうっと一ツ飛びし杖を構えてヒロシをかばう。

(一体なにがどうなっているんだ)

わけがわからない。

女はサングラス越しに松江一家とヒロシをねめまわす。一瞬驚いたようだが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

「イスレにマウリンにイオム……。あんたらしつこいね、わざわざこの世界まで来て」「当たり前よ。リレントレス・クルーエル、あなた放っておいたら悪さするでしょう」

豊と寿子は女を、リレントレス・クルーエルと呼んだ。それが女の名前らしい。では松江一家は？

女、リレントレス・クルーエルはイスレにマウリンにイオムと言った、ということは、それが三人の本当の名前？

それにこの世界とか言うが、それはどういうことだ。

春人は、いやイオムはヒロシを見つめ。

「早く逃げて、逃げて！」

と叫んだ。

「お、おお」

その必死な叫びに背中を押されて、ヒロシはアクセルを開けようとした。それを見逃すリレントレス・クルーエルではなかった。一旦しゃがみこむ姿勢を見せると瞬時に伸び上がるように飛んだ。卍
フリスビーとともに。

「いかん」

豊、イスレは杖をかかげると、その先から稲妻がほとばしった。しかし、リレントレス・クルーエルは咄嗟によけた。それから、まるで燕の急降下のごとく逃げるヒロシを追った。

「危ない！」

寿子、マウリーンはイオムとともにリレントレス・クルーエルを追った。イスレはリレントレス・クルーエルの手が光るのを見て、

「いかん！」

と叫んだ。

「マウリーン、イオム、ヒロシ君を守れ！」

言われなくてもそうしている。ふたりもリレントレス・クルーエルの右手が紫色に光るのを見逃さなかった。

「やめて！ お兄ちゃんには手を出さないで！」

イオムは血を吐きそうなほど叫んで飛行速度を上げて、ヒロシの背中をかばった。が、リレントレス・クルーエルはにやりと笑う。マウリーンは必死の思いで杖をかかげたが、それよりも早くリレントレス・クルーエルの右手は早く動き、紫の光は一筋の光となって射出され、イオムとヒロシを刺し貫いた。

「な、なんだ！」

目の前が突然暗くなった。走っている最中に。

パニックを起こしたヒロシは真っ暗闇の中、急ブレーキをかけた。しかし手応えがなく、まるで宙ぶらりんでいるみたいだ。

「しまった……」

イスレはうめく。リレントレス・クルーエルが光を放つや、イオムとヒロシは瞬時に空くうに融けるように姿を消していった。

それにともない、リレントレス・クルーエルも不敵な笑みを浮かべて自らも紫色の光に包まれて、姿を消した。

「あなた！」

「うむ……」

「リレントレス・クルーエルは、ヒロシ君をエヴァン・ラニンに……」

「そのようだ……」

イスレとマウリオンは苦虫を噛み潰したような顔でうなずき合うと、自分たちも紫の光を発して、姿を消した。

あとには、コウジのDR-Z400SMとハジメのWR250Xが残された。ふたりは、どうして会社をさぼってバイクに乗っているのか、自分でもわからず、ぽかんとしていた。

ブレーキを強く握りしめ、強く踏みつけて、そのままの姿勢でとまっている。

目は硬く閉ざされている。

そのことに気づき、ゆつくりと、目を開けてみれば。

どこまでも広がる青空。その青空を駆け巡る雲、鳥、竜。

「?!?!?!」

今自分はなにを見たのだ。目を凝らしてもっとよく見ようとしてヘルメットを脱いで、周囲を見回す。

「お兄ちゃん！」

春人、イオムの声が耳に響く。

驚いた拍子にD-トラッカーに跨る身体はバランスを崩し、あやうく立ちゴケしそうになり、どうにかふんばる。

スタンドを立てて、バイクを降りて、改めて周囲を見回す。

足元には、白魔術師のような姿の春人。小さな身体で木の杖を握りしめて、ぱつと見愛嬌があり、シヨタ趣味のお姉さんにお持ち帰

りされそうだ。

「なんだこりゃあ」

ヒロシは素つ頓狂な声で、ただ驚くばかり。イオムがいても、なかなか意識できない。

自分はなだらかな草原の丘陵地帯にいた。

四方に草原が広がるなかこんもりと山が盛り上がっていて、そのてっぺんに大きな大樹が一本そびえ立っていた。

ふと、向こう側の景色に見えるものが不思議で思わず歩いてゆく。

「あ、危ないよ」

とイオムはジャケットの横つ腹の部分をつ引っ張りながらついてゆく。

歩みを止めて、景色を眺めて、魂が抜かれたような衝撃を受けて立ちすくむ。イオムはうんしょとジャケットの横つ腹部分を引っ張ってヒロシを少し後ろに引き戻す。

いま自分が立っている草原は、空に浮かんでいる。頭上はもちろん、崖下とおもっていた眼下にも、青空が広がっていた。

episode エヴァン・ラニン

空には自分たちが立っている島と同じような島が、数個見受けられた。

すべて空に浮かんでいた。

思わず腰が抜けてその場にしゃがみこむ。

その島の間を鳥が、翼竜ワイバーンが飛び回っている。しかも翼竜には人が乗っている。ロールプレイングゲームで見る竜騎士そのままに鎧姿も勇ましく腰には剣。

その竜騎士が何騎か集まってヒロシとイオムを上空から竜とともに見下ろしている

「イオム、イオムなのか！」

竜騎士のひとりが上空からイオムに語りかける。

「その鉄の馬の少年は、ガイアの世界の住人か」

「うん！ リレントレス・クルーエルに、こつちの世界に飛ばされちゃったんだ！」

「やはりそうか」

「早く何とかしないと、エヴァン・ラニンだけじゃなくて、ガイアの世界までめっちゃめっちゃにされちゃうよ！」

ヒロシはぼかんとするしかなかった。なにがなにやら、さっぱりわからなかった。

「イオムはその少年についてやってくれ。異変に大変驚いているよ
うだ」

「うん！」

もの言わぬヒロシは腰を抜かして座り込んでいる。イオムは顔を覗き込んで、大丈夫？

と語りかける。

「いったい、ここはどこなんだ？ なんでオレはここにいるんだ？
それに、あの女は？」

「うーんとね……。僕らが今いるのは、エヴァン・ラニンっていつてね、いまいる島はスナイフェーレといってね……」

ヒロシの問いかけに、イオムはこたえる。

エヴァン・ラニン、空に浮かぶ島々の世界。

その島々には必ず一本、世界樹とよばれる大樹がある。

その世界の中心地とされて、いまいるスナイフェーレの丘の高々と一本そびえる世界樹は大世界樹とされて、この世界を創り上げた創生の樹であるという。

この世界の生けとし生けるものたちは世界樹によって創られた。

葉っぱ一枚一枚には意識があり、人々や生き物はすべて世界樹の葉っぱから化身したものだっただ。

ただ樹自体には意識はなく、エヴァン・ラニンの歴史を淡々と見つめていた。

そして葉っぱの中には悪さをするやつもいて、リレントレス・クルーエルはそのひとりだった。

エヴァン・ラニンの世界では、悪い葉っぱとよい葉っぱの戦いや共生が昔から繰り返されていた。

「葉っぱ？ 春人君は、葉っぱから出来ているってのか？」

「うん。あ、それと、僕のほんとの名前は、イオムっていうんだ。

ここでは、イオムって呼んでね」

「え、うん、ああ……。で、イオムやあの女、リレントレス・クルーエルは魔法がつかえるのか」

「お兄ちゃんには、なかなかわかんないだろうけどね。この世界の人たちは魔法が使えるんだ。もっと魔法を練習したら、違う世界にも行けるようになるんだ」

「で、オレたちの世界に来たのか」

「うん。ほら、北欧とかケルトとか、お兄ちゃんの世界に神話があるでしょ」

「ああ」

イオムが北欧やケルトといった言葉を発したことにヒロシはなに

か心を射抜かれた思いだ。この世界の人々は葉っぱから出来ている上に、魔法まで使えて、違う世界に行けると言うのではないか。

しかも、こっちの世界のことも詳しいようだ。

「あの神話のことって、ガイアの世界に引越したエヴァン・ラニンの人たちや動物のことなんだ。ガイアってもともとエヴァン・ラニンの言葉なんだ」

「マジで……？」

確かにこの世界はロールプレイングゲームやアニメで描かれるファンタジー世界のそのものだ。ファンタジーは神話や民族伝承がもたになってる。で、自分たちの世界の神話や民族伝承のものになったのが、エヴァン・ラニンの世界だという。

「もちろん全部じゃないよ。エヴァン・ラニンの人たちが引越したのは、ヨーロッパってところが主だからね」

しかし十歳の子供が、なかなかよく語るものだった。そのことについて相当学んでいるのだろう。

「でも、どうしても、ガイアとエヴァン・ラニンの人たちは、ほんとうに仲良くなるのは難しいんだ。ほら、僕らは魔法が使えるけど、お兄ちゃんは魔法使えないでしょ。動物だって違うし。違う世界に行けるのは僕たちだけだし。そこからどうしても、仲たがいしちゃうんだ」

確かに、魔法やファンタジーは空想の産物だと思っていたから、実際にそれを味わうとなると、恐怖を感じざるを得ないし、ともすれば関わりたくない。関わりたくないってことに関しては、あの女でいやというほど味わった。

違う世界に行くにしても、ヒロシは自分の世界で行ったわけではなく、無理矢理飛ばされたのだ。で、どうやったら帰れるのだろう。「ごめんね。僕はまだお兄ちゃんを帰らせられるほど魔法が使えないんだ」

「練習がまだ足りないのか」

「うん。違う世界に行くのは、すごく難しく、力があるんだ。僕

がお兄ちゃんの世界に行けたのも、イスレとマウリーンの力があつたからなんだ」

「イスレとマウリーン？」

「あ、それは僕と一緒に来た人たち」

「ああ、お父さんとお母さんね、ていうか、家族じゃなかったんだ……？」

「そうだね。僕は世界樹の葉からできてるから、生身のお父さんとお母さんってないんだけどね。でも赤ちゃんからはじまるから誰かと一緒に暮らして、育ててもらわなければいけないんだ。だからあくまでも共同生活者としての、家族だね。お兄ちゃんからしたら、おかしいでしょ」

「うーん……」

おかしいとかいう以前に、ついていけない。でも「変」だといわれることにすこし恐れを感じているのが、声でわかった。

お人よしの性分がここではたらいたヒロシは、

「でも、オレらの世界でもさ、人類皆兄弟って言葉があるぜ。オレらの世界と同じさ」

と言ってフォローする。確かに生けとし生けるものの起源は、さかのぼれば皆同じものにたどり着く。エヴァン・ラニンでもヒロシの世界でも、仕組みは違って、それは同じだ。

「っていうか、あの女、リレントレス・クルーエルは、なんで悪さするんだ」

「それは、わからない。イスレやマウリーンが言うには、リレントレス・クルーエルは自由を愛しすぎる人なんだって」

なんだかやけに哲学的だ。

「ものすごく魔法の才能があるんだけど。それ以上に楽しく遊ぶのが好きらしくて、それがひどくて、悪さになっちゃうようなんだ」

話を聞いてて、まるでにわかにも道徳の授業を受けているような気分だった。あのスタイルも、ガイアで見つけて気に入って取り込んだのは言うまでもない。

しかし、一理あることだ。自分だって、法を犯してまで走りを楽しんでいるじゃないか。

サーキットに行けばいいのだが、サーキットは遠くてお金がかかる。だからやむなく。なのだが、違法は違法だ……。

ヒロシは自分のことを言われているようでもあって、何も言えなかった。

「で、イオムたちは、リレントレス・クルーエルを見張るために、オレらの世界に来たのか？」

「うん。僕らの他にも、異世界にいける人たちが追いかけて、どうにかしようとしているんだ」

どうにかしようとしている、というのは、退治ってことか。しかし、リレントレス・クルーエルの魔力は大きい。どうやったら退治できるんだろう。

「魔法を使えば、自分の姿を葉っぱに変えることもできるし、相手を葉っぱにすることもできるんだ。リレントレス・クルーエルを葉っぱに戻して、世界樹に戻すんだ」

「封印ってことか」

「そうだね」

しかし、話をしてもヒロシにはすべてを呑みこむことは難しかった。エヴァン・ラニンのなにもかもが、ヒロシの世界、ガイアとは違っていた。

なにより、そんなことより、早く帰りたい、という気持ちが大きかった。

episode 10 戦いの気配

「友情の語らいは楽しいかしら？」
声が響く。

ふたりははつと顔を上げた。

上空には卍フリスビーの上で、仁王立ちするリレントレス・クルーエルがいる。

「リレントレス・クルーエル！」

ふたりは声を上げて彼女を見上げた。

イオムはヒロシの前に出て、杖を構える。

「悪い事は言わないから、もう悪さはやめるんだ」

「ご忠告どうも。でも、私は楽しく生きたいの」

リレントレス・クルーエルはゆっくりと卍フリスビーを降ろし、スナイフェーレの地上すれすれまで降下し、ヒロシらと視線を合わせる。

「これ、なにかわかる？」

二枚の葉っぱを差出、ふたりに見せた。

上空で竜騎士たちが、リレントレス・クルーエルだ！ と叫んで集まってきた。

イオムは、最初きょとんとしていたが、目を見開き、次に口を開けて、

「ああー」

と叫んだ。

「イスレ、マウリーン！」

イオムの驚きはそれこそ胸が張り裂けそうなほどだった。あろうことが、イスレとマウリーンはリレントレス・クルーエルによって葉っぱに戻されていた！

葉っぱに戻されていても、気配でわかった。

三人ともエヴァン・ラニンにゆこうとしたのだが、リレントレス・

クルーエルはその途中の狭間でイスレとマウリーンを襲い葉っぱにしたのだ。

異世界の間を行き来するのは難しく力が要ることだ、ことに狭間にいるのはなおさらだ。早くエヴァン・ラニンに行きたい気持ちから移動を急ぎ、備えが不十分だったところを、襲われてしまえばどうしようもない。

「観念しろ！ リレントレス・クルーエル！」

竜騎士たちが集まりスナイフエールを取り囲もうとする。手には剣。それを見てヒロシはさすがに怖い。ようするに、竜騎士たちはリレントレス・クルーエルと、戦争をしようとしているのだ。

それに巻き込まれるのか、と思うとどうにも恐怖を感じるのだった。

隣でイオムは杖を抱きしめるように身を縮めて、ぶるぶると震えている。

「あんたらが私にしようとしていることを、したまですよ。ほらガイアで、己の欲せざるところ人にほどこすべからず、っていうでしょ」
自分ことを棚に上げて、リレントレス・クルーエルは孔子の教えを持ち出す。妙にガイアにかぶれているところがあるようだ。

「卑怯！」

竜騎士が一騎、剣を強く握りしめ怒りの叫びを上げる。仲間が人質にされて、手を出しあぐねてやきもきしている。

気がつけば、イオムと同じような格好をした魔術師たちが丸や三角、四角など様々な形をしたfrisbeeに乗って集まってきている。

リレントレス・クルーエルもそうだが。ある程度宙に受けても、竜のように飛べないようだ。その補助のために魔力を用いてfrisbeeを使っているようだ。

イオムは歯を食いしばって、今にも泣き出しそうだ。それもそうだろう。魔女に家族を人質にされてしまったら、いまだ十歳の少年の心はどれほど苦しいだろう。

それを見て、ヒロシは拳を握りしめた。今の状況は怖い、なんとかしたかった。しかし自分になにができるのだろう。

「ふん、小癩な」

さつとリレントレス・クルーエルは右手を蠅でも払うように振った。すると、途端に突風吹き荒び、竜騎士や魔術師たちは抗いきれず「うわ！」と叫びながら吹き飛ばされてしまった。

無論これで黙っているわけがない、

「おのれ！」

と竜騎士は剣を振り上げ、魔術師は杖をかまえ、リレントレス・クルーエルに勇ましく挑もうとする。

「あ、ああ！」

思わず、やめて！ と叫びそうになって、口を開けたままへたりこんでしまった。家族が味方の手にかかるかと思っただが、どういふわけか竜騎士や魔術師たちはスナイフェーレに降下することができない。

リレントレス・クルーエルめがけて突っ込もうとするが、なにか波に押し返されるようにふたたび上昇してしまうのだ。

「無駄よ。結界を張ったわ」

こともなげにリレントレス・クルーエルは言ったが。それは彼女の魔力の大きさをしめすことだった。

「おのれ！」

というような声が、あちらこちらで聞かれた叫ばれた。

ヒロシとイオムは啞然とするしかなかった。

もはやこれまでの、絶体絶命。リレントレス・クルーエルの魔力の大きさあまりに絶大。なすすべもないのか。

(冗談じゃない。こんな、わけのわからねーことで……)

リレントレス・クルーエルはイオムよりヒロシを見ていた。一体自分をどうするつもりだろう。と思うと、サングラスを外し色違いのオッドアイの瞳にヒロシを映し出す。

「どうしてあなたは操れないのかしら」

と言った。その顔は、シリアスだった。どうやら本気で考えながら言っているようだ。

「はあ？」

そういえば、ヤスタカやクラスメートらがおかしなことにヒロシに危害を加えようとしたが、あれはリレントレス・クルーエルに操られてのことだった。エヴァン・ラニンの魔術師はその気になれば人も操れるようだ。で、リレントレス・クルーエルはそれを悪用している、というか、彼女にしてみればそれも遊びの一環なのだろう。「そうね、あなたは純粹すぎて取り込まれないのね。人はなにかしらの欲があるわ、その欲をすこし突けば簡単にあたしの操り人形になる。あなたには、そんな私の突ける欲が、ないわ……！」

シリアスに光る色違いの瞳には、怒りすら感じられる。彼女にしてみれば、ヒロシの世界、ガイアの間人は簡単にあやつれるおもちゃのようなものだった。それが操れないのは、屈辱だった。

「あなたは純粹すぎるわね。それが原理主義を生み世の中に害をもたらすか、それとも、誰もなしえない大業をなしうるか。そのどれかね」

ヒロシには何を言われているのかさっぱりわからない。イオムには、少しわかった。確かに、ヒロシが操られないのはよかったと思うと同時に不思議でもあったが、リレントレス・クルーエルの話を聞き、納得。

「それよりも」

と言いながら、リレントレス・クルーエルはサングラスをかける。「私と鬼ごっこしましょうよ。前からその鉄の馬、気になっていたのよ。楽しそうって」

「なんだって？」

「だから、私と鬼ごっこをしましょうって言うのよ」

「オレのD・トラッカーとでか？」

「そうよ。私が逃げて、あなたが追うのよ。逃げる私を追って、身体に触ることができれば、あなたの勝ち……」

「と言いつつ、二枚の葉っぱを差し出す。」

「で、勝てばふたりを解放してあげる」

「言われた瞬間に拳を握りしめ、

「わかった」

というとき愛機D・トラッカーのもとまで歩みより、ヘルメットを被り、グローブをはめる。

「そんな、お兄ちゃんが戦うことはないだよ。危ないよ。リレントレス・クルーエルに、イスレヤマウリーンのことは、僕らに任せ……」

「それができる性分なら、苦労はないけどな」

ヒロシはスモークシールドを上げて、イオムに微笑んだ。

D・トラッカーは、目覚めの息吹が吹き込まれた。

空を打つ咆哮が、スナイフェーレに響いた。

イオムは何もいえず、D・トラッカーの揺らす空に身を任せるしかなかった。

「あぶねーから、下がってな」

アクセルを開けると、行くか！ とD・トラッカーは咆えた。リレントレス・クルーエルは葉を胸ポケットにしまい、楽しそうに笑った。

「じゃあ、早速はじめましょうか！」

汎フリスビーはひるがえり、丘を駆け上がろうとする。ヒロシはシールドを閉めて、D・トラッカーは雄叫び上げて、後輪で地を蹴

り駆け出した。

イオムはそれを黙って見送るしかなかった。竜騎士や魔術師たちはまさに蚊帳の外で、成り行きを見守るしかなかった。

丘の頂きには大世界樹がある。

大世界樹はいまこの世界でなされていることを、静かに見守っていた。

卍フリスビーは低空飛行で丘の頂きを駆けのぼる。それをヒロシのD・トラッカーが追った。

竜騎士に魔術師、イオムは、この唐突にはじまった鬼ごっこを固唾を飲んで見守っていた。結界を破ろうと皆試行錯誤しているが、なかなか破れない。

「リレントレス・クルーエルは、大世界樹を倒す気か！」

なにをするかわからないリレントレス・クルーエルだ。勢いよく丘を駆け上るのを見ていたら、大世界樹を倒すことなど簡単にしてみたいそうだった。

全ての起源である大世界樹を倒せばどうなってしまうのか。それはエヴァン・ラニンの滅びを意味していた。

そうと知らず、ヒロシはアクセルを開けてリレントレス・クルーエルの背中を見据えていた。さすがに今は火急のときゆえヒップには目が行かない。

D・トラッカーは上り坂で急加速しながら、フロントが浮きウイリーをする。

「すごい」

イオムは思わずつぶやく。

ガイアに来てから仮面ライダーをきっかけにバイクというものを知った。そのバイクに心が寄せられている。だから毎週の仮面ライダーの放送がガイアでの一番の楽しみだった。

卍フリスビーは頂きまでのぼり、大世界樹の傘下まで迫ると、そこで止まって笑顔でD・トラッカーを待ち受けた。

ヒロシは油断せずアクセルを開けてリレントレス・クルーエルに迫った。

アクセルを開ければ、周囲の景色は吹き飛ばるように流れてゆく。空を打つサウンドとともに風を切るのは、エヴァン・ラニンでも同じだった。

大世界樹は巨大な傘のようにスナイフェーレ島の丘にたたずんで、リレントレス・クルーエルとともにヒロシを待ち構えているようだった。

「おいで」

という声が聞こえそうだった。

「なめてんのか」

頂きに迫り、大世界樹の傘下に入りそうなところで、やっぱりリレントレス・クルーエルは逃げ出した。

汎フリスビーは大世界樹の周囲を左回りに大きくぐるりと回ろうとする。そのあとを追って、D・トラッカーも大世界樹の周囲をぐるりと大きく回ろうとする。

が、草原なのでタイヤはグリップせず、バイクを傾け足を突き出し、後輪はスライドしまくりのドリフト走行で前輪は逆ハンを切らないとうまく走れない。で、速度もなかなか乗らない。

それでも、こけるかこけないかのギリギリのラインで、ヒロシは愛機を走らせていた。

風が吹き、ざわ、と大世界樹の葉っぱたちが騒いだ。

「えっ」

イオムは思わず大世界樹を見上げた。それから、

「お兄ちゃんがんばれー！」

と叫んだ。イオムには聞こえた。いや、上空の竜騎士や魔術師たちにも聞こえた。

大世界樹の葉っぱたちの、

「がんばれ！」

という声。

がんばれの声は、マシンサウンドに包まれているヒロシには聞こえないが、そう言われている思いでアクセルを開けていた。

大世界樹の周囲をオーバルトラックのようにぐるりと回っていたが、リレントレス・クルーエルはにこりと笑うと、バレエのように華麗に身をひるがえして卍frisビーを方向転換させて、追うヒロシのD・トラッカーに迫った。

このままでは正面衝突だ。

「マジかい！」

慌ててパニックブレーキングしそうだったが、咄嗟のところ落ち着き、強くブレーキはかけずやんわりかけて体勢をととのえ、どうにかリレントレス・クルーエルをかわそうとする。

が、リレントレス・クルーエルはヒロシが右に交わすや同じように自分は左によってあくまでヒロシと真正面で向き合おうとする。

「馬鹿野郎がッ！」

ヒロシはアクセルを緩めなかった。せっかくなかかわしてもまたよってくるなんて、何を考えてるんだと思ったが、相手は人間じゃない！なら遠慮は無用と、半ばやけでリレントレス・クルーエルに向かい突っ込んだ。

リレントレス・クルーエルのサングラスに、ヒロシとD・トラッカーが映りこみ、その端っこには、大世界樹も映りこんでいた。

イオムは息を呑んだ。正面衝突をする気が、と。

だが突然、ふたりの間で、草原が盛り上がった。卍frisビーのリレントレス・クルーエルはひらりとかわしたが、ハイスピードで迫るD・トラッカーはさけられなかった。

「いっけー！」

ヒロシは思い切つて、突然の盛り上がりさえそのまま突っ込んだ。D・トラッカーは雄叫び上げて、盛り上がりジャンプ台にして、飛び上がった。

「うわぁー！」

一気に視界がひらけ、草原が眼下に広がる。

ややバランスを崩してD・トラッカーは横になった。が、どうにか立て直して、着地。

リレントレス・クルーエルは楽しそうにそれを眺めていた。

「鬼さんこちら、手のなる方へ」

人差し指を立てて、倒して立ててを繰り返し、着地し体勢を立て直したD・トラッカーに手招きし、今度は丘を下る。下るといつても、ヒロシとイオムがいたのと反対側に下った。

リレントレス・クルーエルを追うヒロシの視界に銅像が一体入った。それは竜に乗る竜騎士の銅像だった。

「リレントレス・クルーエル！ その銅像に手を出してみろ、ただでは済ませぬぞ！」

数多の竜騎士が叫ぶ。イオムは息を切らしながら丘を駆け上がって、大世界樹の傘下から丘のふもとを見下ろす。

「ああ、ジョーイと炎の嵐……」

丘のふもととの銅像は、六百年前、エヴァン・ラニンの人々と別の異世界から侵攻してきた魔族との壮絶な戦いにおいて、我が身を賭して戦いエヴァン・ラニンを救った伝説の竜騎士・ジョーイとその愛竜である炎の嵐の銅像だった。

彼はこの世界では世界樹にひとしい存在だった。それから二百年のち、いまから四百年前、ふたたび魔族の侵攻があったとき、この炎の嵐が復活しエヴァン・ラニンを救ったという伝説があり、それは今も、これからの時代へと語り継がれている。

そうとは知らず、ヒロシは銅像をパイロンのようにしてUターンするリレントレス・クルーエルを追って、自分も律儀に銅像を真ん中に円を描くようにターンした。

無論後輪はスライドし前輪は逆ハン切つてのドリフトでだ。

D・トラッカーはいざとなればいつでもヒロシを振り落とそうと暴れてコントロールが難しかった。未舗装路でスピードを出しマシンをコントロールするのは、舗装路でマシンをコントロールするこの数倍も神経を使った。

なにセタイヤがグリップしないのだ。アスファルト舗装ならタイヤも食いついて走れるのだが、今は草と土である。それはタイヤの回転のパワーを受け止めきれず、ふんばらせてくれない。

ヒロシはこけるかこけないかのギリギリのラインをさぐりつつ、アクセルをコントロールしなければならなかった。

リレントレス・クルーエルは魔法を使い、地形も変えることが出来た。

ふっ、と不敵な笑みを浮かべれば、ヒロシの目の前で突然地面は盛り上がる。今度は低く、波打つように盛り上がりが連なり、凸凹が行く手を阻んだ。それはまるでウォッシュボードのようだった。

「くっ！」

ヒロシは腰を浮かし、アクセルをコントロールしウォッシュボードをクリアしてゆく。

どただだ！ とD・トラッカーは上下に揺れながら突っ走る。振り落とされないようにハンドルを握りしめ、膝でシートを挟む。

「おお、見事だ」

竜騎士たちは思わず喚声をあげる。リレントレス・クルーエルとの鬼ごっこを受けて立って、大丈夫か、と心配したがなかなかどうして。うまく鉄の馬を操り、リレントレス・クルーエルを追いかけている。

「やるじゃない、じゃあこれはどうかしら！」

いきなりD・トラッカーの真下の草原が盛り上がり、ヒロシともども宙に放り上げられてしまった。

「うあー！」

と思わず悲鳴が上がり、D・トラッカーは宙でウイリーをしヒロシはバランスを崩し、あるうことか思わず手がハンドルを離してしまった。落ちると誰しもが思った。が、シートを咄嗟につかんで身体を引き戻し、シートに腰掛け着地。

おお、という喚声上がる。イオムももう、はらはらどきどきだ。リレントレス・クルーエルも満足そうだ。その右手が高々と上がった。と思えば、今度は草原は思いっきりへこんだ。それはまるで蟻地獄のように。

リレントレス・クルーエルは卍フリスビーを操り、蟻地獄の中に突入する。ヒロシのD・トラッカーも続く。

中は広く、学校の体育館と同じくらいのスペースがあった。リレントレス・クルーエルと卍フリスビーは一旦蟻地獄の底まで駆け下る、下りなので勢いもつく。ヒロシのD・トラッカーも底まで駆け下ると、リレントレス・クルーエルに続き一気に外向かって駆け上がる。

まるでカタパルトから飛び立とうとするかのように空めがけて加速し、上りきれば、卍フリスビーは一瞬浮き上がった。リレントレス・クルーエルは身体をしなやかに回転させると、再び蟻地獄を駆け下る。それは海面からジャンプして遊ぶシャチを思わせた。

ヒロシとD・トラッカーも上りきって一瞬ジャンプした。ただジャンプするのではなく、少し斜めにジャンプし、飛び上がりきったところの一瞬無重力のように浮く一瞬の間、咄嗟に斜めに飛んだ慣性の勢いに乗って身をよじるようにD・トラッカーを「横」に倒すようにマシンのケツを振った。

D・トラッカーはぶうんとうなりをあげるように勢いよく百八百度横に回り、ケツを振り上げ、真つ逆さまに蟻地獄へと落ち、D・トラッカーはうなりをあげて駆け下ってゆく。

リレントレス・クルーエルは一瞬振り向き、追うヒロシとD・トラッカーをサングラスに映し出し不敵に笑う。もう楽しくて楽しくてしかたがないようだ。

それから、蟻地獄を駆け下り駆け上がってジャンプした蟻地獄に落ちて……、を何度か繰り返した。

イオムは杖を強く握りしめ、ヒロシとリレントレス・クルーエルの鬼ごっこを固唾を飲んで見守っている。とともに、ヒロシの走りに目を奪われていた。

（僕はガイアに残って、大きくなったらバイクで走りたい）

リレントレス・クルーエルを見張り封印するために来たガイアでバイクを知り、知らないうちにその魅力に取り付かれていた。

リレントレス・クルーエルを追い引越しを繰り返して、また異世界から来たことを知られてはいけないので、友達もできなかった、つくれなかった。イスレにマウリーンはよくしてくれるものの、やはりさびしかった。

魔法の素質があるから、ガイアでリレントレス・クルーエルの追跡の任に当たるのだが、魔法の素質があっても楽しいと思うことは少なかった。だけど、バイクへの憧れが心の慰めとなり、希望となり、いままで頑張ってこれた。

だから、隣のヒロシがバイクに乗っていることを知ったときは、すごく嬉しかった。

ヒロシと友達になりたかった。

そのヒロシが、強引にエヴァン・ラニンに召喚されたとはいえ、エヴァン・ラニンのために走っている！

「なんとという見事な手綱さばき！」

竜騎士や魔術師たちは、リレントレス・クルーエルを追って極限の走りを見せるヒロシとD・トラッカーに驚いていた。

ガイアの人間がエヴァン・ラニンのために戦うという前例はなかった。いままで、何人かのガイア人がエヴァン・ラニンに来たが、自分の世界と違いすぎるといふことで、皆腰を抜かし強い望郷の念に駆られて、とどまることすらしなかった。だからすわやというとき、エヴァン・ラニンのために戦う者も、残念ながいなかった。

「Fリスビーとリレントレス・クルーエルは底まで駆け下ると、渦巻きのようにぐるぐると蟻地獄の壁を駆け、ヒロシとD・トラッカーも続いて底まで駆け下るとリレントレス・クルーエルを追って同じく蟻地獄の壁を駆けて渦巻きのようにぐるぐる回りながら上がってゆく。

渦巻きみたいにくるぐる回りながら上りきって、ジャンプして草原に着地。ふたたび草原での追いかけることになった。とともに、蟻地獄は姿を消した。

リレントレス・クルーエルは笑っている。彼女の一番の興味は、エヴァン・ラニンやガイアをどうするかよりも、ヒロシとD・トラッカーがどんな走りを見せてくれるかのようだ。

あいかわらずな不敵な笑みをうかべ、ペースを落とす。一気に近づき、ヒロシは「勝てるか？」と勝利を急ぐ。が、もうすぐというところで、まんまと逃げる。

「遊びやがって」

ちえ、と舌打ちし、追撃の手は緩めない。一筋縄でいかないのはわかっていたことだ。

と思えば突然足元が盛り上がり宙に飛ばされる。突然のことに体を崩し、腰がシートから離れる。が、咄嗟に足でシートを挟んで元に戻り着地。

「エクストリームってか！」

どうにもリレントレス・クルーエルがヒロシにエクストリームな曲芸走行をさせたがっているのがわかってきた。

しかし、いつまでもこんなことを続けられるわけもない。

リレントレス・クルーエルの操るFリスビーも速く、ヒロシも必死になって追いかけるのだがなかなか追いつけない。

その背中は逃げ水のように、近づけば遠ざかってゆく。

D・トラッカーはうなる。空を打つサウンドはスナイフェーレに轟く。イオムに竜騎士、魔術師たちは祈る思いで鬼ごっこを見つめている。

「あっははははは」

無邪気にリレントレス・クルーエルは笑う。

その無邪気さが、イオムには不思議でもあり怖くもあり。その魔力で遊びたいのはわかるが、それが悪さにつながらなければ、いい遊び相手になつたらうに。

追い追われするうちスピードは高くなる。景色は吹き飛び、風を打ち碎き風の破片を感じ、風を抜く。

「もつと楽しいものを見せてよ！」

ハイスピードにもかかわらず、2Fリスビーごと前転をしざま、リレントレス・クルーエルのサングラスひかり、その手が地面を指差せば。

ヒロシの眼前で地面が急激に盛り上がった。

「くそつたれー！」

突然のことに避けようもなかった。意を決してヒロシは盛り上がった地面をジャンプ台に飛び上がったが、スピードが出ていたためにかなりの高さを飛んだ。しかも悪いことにバランスを崩して、バイクごとバック転しようとし、足がステップから離れた。

「うわ！」

悲鳴がヘルメットの中響く。

「あ、危ない！」

イオムは思わず目を硬く閉ざした。それこそヒロシが落ちると思つたのだ。今までどうにかリレントレス・クルーエルが地形を変形させるのをしのいできたが、いよいよ年貢のおさめどきか。

「あら、もうお終いかしら」

もう落ちると思いつてか、リレントレス・クルーエルは逃げるのをやめて高みの見物をしゃれこむ。

D・トラッカーは回転し腹を天向けにしようとしていた。ヒロシ

はハンドルを握りしめて、バイクにぶら下がっていた。もう、落ちる、と誰しもが思った。

「なんだこのやるー！」

叫んだ。ヒロシは叫んだ。

落ちてたまるか、とハンドルを強く握りしめ、腹を天に向けるD・トラッカーにぶらさがり、万歳のポーズをとる。それから、腹筋にあらん限りの力を込めて足を蹴り上げステップに戻しその勢いでぐるりと回転し体勢を立て直した。

「KISS OF DEATH！」

硬く目を閉ざしていたイオムだったが少しあけて見てしまい、思わず叫んだ。ガイアで知ったBSの放送や動画サイトで、バイクで高く飛んでさまざまな曲芸走行を見せるバイクのモト・エクストリームスポーツ、X-GAMESのMOTO・Xを知り、仮面ライダーともども、すごいすごいとよく見ていた。

それを、エヴァン・ラニンで、ヒロシが見せてくれようとは。キス・オブ・デスはその技の名前だ。

D・トラッカーは勢いよく着地しリレントレス・クルーエルを追う。上空の結界の外でも、「おおー！」という喚声が轟いた。

「な、なんて奴なの！」

予想に反しクルーエルにピンチをしのいだヒロシとD・トラッカーに焦ったリレントレス・クルーエルは、またも魔法で地形を変えて、ジャンプ台を出現させた。が、もうヒロシはびびらない。キス・オブ・デスを決めた勢いで怖いものなしでアクセル全開でハイスピードで勇んで飛び上がった。

スピードと勢いにとったD・トラッカーは高く飛び上がり、今度はわざとバイクを回転させようとする。

今度は足をステップにしっかりとつけて全身全霊を賭けて飛び上がるD・トラッカーをぐるりと回転させた。が、着地体勢はとらず、またも回転させようとする。

「あ、今度は……！」

今度は目を閉ざさない。しっかりとヒロシとD・トラッカーを見つめていた。

D・トラッカーはジャンプの頂点に達して落ちようとしながら、回転していた。

「DOUBLE BACK FLIP!」

イオムはまたも叫んだ。高くジャンプし空中でバイクごと二回転する高度な技だ。このダブル・バックフリップはBS放送や動画サイトでよく見て、すごいすごいと思っていたが。ヒロシがこうして見せてくれるなんて夢にも思わなかった。

魔法が使えても未来までは予見できない、とはよく言われていたことだが。それがこういう形で現れた。

リレントレス・クルーエルは自分の障害がことごとくしのがれて、D・トラッカーの上で呆然と立ち尽くしている。そこへ、ヒロシとD・トラッカーが勢いよく迫る。

「!」

様子がおかしい。ヒロシは急ブレーキをかければ、D・トラッカーは後輪を上げた逆ウィリー、ジャックナイフ状態で前輪を転がしてゆく。

ころころと転がり、後輪着地。リレントレス・クルーエルの眼前まで来たが、彼女は逃げない。

それどころか。ふっ、と不敵な笑みを浮かべて、ヒロシの黒いヘルメットの頭にキスをした。

「な、なんだ」

「あら、勝利の女神からの祝福のキスはおいやかしら?」

リレントレス・クルーエルは今度はシールドをつまんで突然上げて、唇を突き出し鼻柱にキスをした。

ひゃ、とイオムは手で目を隠した。

「.....」

ヒロシ呆然。

「見えるわ。あなたの心の青い空が。それは、心に穢れがなければ

スナイフエーレから天国が見える、という言い伝えのままの、空ね……」

そう言うと後ろに下がり、胸ポケットから葉っぱを二枚とりだし、ふつと息を吹きかけて飛ばす。

そうすれば、二枚の葉っぱは飛びながら人の形になり、それは徐々に大きくなって人間になってゆく。

それは松江豊と寿子、いやイスレとマウリンだった。

「イスレ、マウリン！」

イオムは駆け出す。イスレとマウリンも、元に戻ったのに気づき、我知らずイオムのもとまで駆ける。

リレントレス・クルーエルはサングラスを外したオッドアイでそれを見つめながら、光に包まれて、姿を消す。

同時に結界も消えて、竜騎士や魔術師たちは急いでスナイフエーレに降り立ち、ヒロシとD・トラッカーを取り囲む。

「見事だ！」

と賞賛が惜しみなく送られる。ヒロシは照れて、戸惑っている。

リレントレス・クルーエルはこの負けを素直に認めて、姿を消したようだ。その魔力の気配が消えているのを察し、皆安堵していた。

エヴァン・ラニンは救われたのだ。

イスレにマウリン、イオムは互いに抱擁しあい、ともに暮らす家族の無事を喜んでいた。

episode 14 ツーリング

ヒロシはその三人を、特にイオムを見つめれば、イオムもヒロシを見つめていた。

思わず、互いに笑顔になって、右手を挙げて親指と人差し指、小指を立てれば、イオムも続き同じように右手を挙げて親指、人差し指に小指を立てた。

「すまんのう。ほんとうならば、そなたを厚く歓迎し宴を催したいところじゃが。エヴァン・ラニンとガイアは、深く関わるのをよしとしておらぬのじゃ」

年老いた魔術師が一人、杖をヒロシに向けた。すると、光に包まれて、D・トラッカーとともに姿が消えた。

「ああ……」

イオムは哀しそうな瞳でそれを見ていた。エヴァン・ラニンの世界はガイアと違うところがありすぎるゆえに、うまくやっていけない、やっつけていけないことが多々あった。哀しいことも多々あった。その哀しいことを避けるため、やむなく深く関わることを避けるようになった。

「惜しいことじゃ。しかし、大世界樹も、ジョーイも、我らも、ガイアから来た鉄の馬の勇者を忘れることはないであろう」

老魔術師は、空を見上げた。澄んだ空だった。ヒロシの瞳も同じように澄んでいたのが印象的だった。

大世界樹は風に揺られながら、静かにすべてを見守っていた。

それから、リレントレス・クルーエルは今までと同じようにエヴァン・ラニンとガイアを歩き来しているが、悪さは働いてないようだ。おかげで事件もなく平穏そのもので、エヴァン・ラニンの人々はリレントレス・クルーエルが改心したのだと喜んでいた。

当のリレントレス・クルーエルはガイアの書物をよく読むようになった。その書物には、鉄の馬の絵が貼り付けられていた。

ヒロシは自分の家の前で、D・トラッカーに跨ったまま停まっていた。

「あれ、オレなにやってんだ」
何も覚えていない。

おかしい。と思ったが、どうにも思い出せない。異世界のエヴァン・ランンに行ってたことを忘れていた。老魔術師がそうしたのだが、わかるわけもなかった。

「ヒロシ、あんたなにやってんの」

母親が家から出て、家の前で突っ立っている息子を不思議そうに見ている。

「いや、オレ、どうしちゃったんだろうと思って……」

「変な子だね。今日は学校、臨時休校で遊びに行ってたんじゃないの」

「え、臨時休校？」

わけがわからない。なにか他の理由であったような気がするけど、どうにも思い出せない。

「あ、隣の家は？」

ふと、口から出る言葉。しかし母親はぼかんとして。

「隣。ずっと前から空き家じゃない。どうしたの？」

という。ヒロシはぼかんとして「ああ、そう」とだけこたえて、なぜそんなことを言ったのか自分でもわからないまま、部屋に戻った。

部屋に戻って、なんとなくDVDレコーダーに録画していたX・GAMESのMOTO・Xを見た。

見ていて、なぜか、なにかを手放さざるをえなくなって、それが哀しいような気持ちになって、涙が溢れて、泣いていた。

それから学校に通いアルバイトに励み、バイクに夢中になる日々を送れた。

それは、なんでもない日々かもしれない。でも、そのなんでもない、ということが大切なことだと、なぜか自分でも不思議なくらい思えた。自分は老けた人間なのかと葛藤しつつ。

それよりも、夏休みに向けて、ヒロシはバイトに励んだ。夏休みは四国の酷道439（国道439号）と阿蘇山に行くんだ、と気合が入った。

そして日曜日にはD・トラッカーとともに風となり、風を抜いてゆく。

街を駆け抜け、峠道に入りさあ行くぞ、と加速したとき。

ふと、葉っぱが四枚、目の前でひらひらと飛んだ。

かまわず加速し、峠道を疾走すると、四枚の葉っぱはまるでヒロシと競争するかのようになり、しばらく目の前でうまく風に乗って飛んでいた。

「なんだ？」

四枚の葉っぱに、なぜか懐かしさを覚えて、我知らず葉っぱを追う自分がいた。

上り坂にさしかかれば、坂の上で白い雲の泳ぐ青空が広がるのが見えた。葉っぱは、空に向かって飛び立つかのように風に運ばれて坂を上り。上りきれば、まさに空へと飛び立って、どこまでもどこまでも、昇っていった。ついには空にとけこんでいった。

ヒロシは坂を上りきったところでとまって、四枚の葉っぱが昇ってゆくのを見送っていた。

気がつけば、右手を挙げ、親指と人差し指と小指を立てて。

あとで、オレなにやってるんだ、と気づいて恥ずかしくなった。

ついに夏休みに突入し、ヒロシは天にも昇る気持ちでD・トラッカーとともに四国と阿蘇山目指して駆けた。

リアに荷物をくくりつけられたD・トラッカーはヒロシの気持ちを代弁するように、機嫌よく咆えていた。

寝ぼけまなこの両親に「気をつけるのよ」「おみやげお願い」と

見送られながら、陽が昇る前に出発した。風は夜の冷気を含んでいたが、日が昇るにつれてむっとする熱気を含んでいった。

峠を越え山道を走るところミラーに太陽の光が反射して、丁度目に当たってまぶしかった。が、これがツーリングしているという気持ち盛り上げた。

やがて瀬戸大橋にいたり、瀬戸大橋を渡り瀬戸の穏やかな島々の景色や瀬戸の工場たちを見下ろし、強い風に気をつけながら、四国の香川県に入つてすぐ見える山の上の教会を見上げつつ、高速道路を走り続け進路を東にとり徳島県を目指した。

ふと、四枚の葉っぱが目の前に現れた。

風に乗り目の前をひらひらと横切つてゆく。

「……」

なぜか、心に沁みる。油断をすれば泣いてしまいそうだった。

それを振り切るようにアクセルを開けた。

近代的な中に南国の雰囲気のある徳島県徳島市に着き、日も落ちていたのでユースホテルで一泊し、翌朝、徳島市から高知県四万十市へと通じる距離300キロオーバーの酷道439（与作）を走った。

酷道とは国道でありながら道路状況が酷い道を揶揄つたものだが、ヒロシのような物好きは好んでこの酷さと冒険を求めた。

しばらく走れば深い山の真っ只中へと突入し標高も高くなり1000メートルを越え、道路状況も、狭く曲がりくねって、なんとも走りづらい。が、それがたまらなく楽しい。

山が波打つように連なり、深い谷を見下ろし、雲は山のすぐ上で頂上に刺さるかのように山を覆い、まるで別世界にいるような思いで西へ西へと走り。

高知県に入る直前、京柱峠というところでは、鹿の出迎えを受けた。ヒロシは驚き鹿も驚き、鹿はぴょんぴょん跳ねながら逃げてゆく。その姿は愛嬌があり、バンビという言葉が知らずに浮かぶ。

「逃げなくてもいいのに」

とつぶやきながら、鹿を見送ったあと、県境をまたぎ猪肉うどんしんくが食べれるお店があったので猪肉うどんに舌鼓をうち。西と東に広がる展望をたのしんで。西を目指した。

439は長かった。しかも道もよくないのでペースを上げられず、平均速度は30キロほど。走りきるのに、丸い一日かかった。さすがのヒロシも疲れていた。が、439を走れたという喜びでテンションは高かった。

四万十市で一泊し、翌朝フェリーで九州に渡った。

Last episode さいつこー!

潮と重油のまざったにおいに、フェリーの船内に響くエンジンの音に、航海中の揺れ。ことに、フェリーに出入りするときの格納庫に響く車やバイクの音が、九州に渡るんだという気分をいっそう盛り上げ。

上陸してから、ハイテンションと緊張を同時に含んで一路阿蘇山を目指した。

火の国九州は台地の国でもあった。まばゆい太陽の光を受け、D-トラッカーは台地を上り、草原広がるやまなみハイウェイにたどり着いた。

港から阿蘇山まで急激な坂道は少ないものの、ゆるめの坂を上り徐々に徐々に標高が高くなってゆくの、四国のように駆け上がるという実感がなく、今走っているところが1000メートル近い標高であるとやまなみハイウェイで知ったときには、まさか、と一瞬信じられなかった。

しかし、青空を泳ぐ雲は近く感じられた。

すれ違うバイクがいればピースをしたり手を上げたりの挨拶を交わしつつ、やまなみハイウェイを南下し、阿蘇山の草千里にたどり着こうものなら、もう感動もので声も出なかった、というか若いヒロシが黙っているわけもなく、すげーすげー、を連発し、長い距離を走った甲斐があつたと感激していた。

四方に広がる広い草原に阿蘇の山。世界有数のカルデラ台地は伊達ではない。やまなみハイウェイに入ってから、その自然の雄大さに、ヒロシはただ感激するばかりだった。

草千里のみやげ物屋の駐車場で缶コーヒー片手に、青空と自然を満喫しながら、そろそろ火口に行こうかと思つたとき、オフロードと小さなハーレーのようなバイク二台近寄ってくる。

一台は白いセロー250。もう一台は赤いVツイン・マグナで、

リアシートには子供が乗っていた。

ヒロシを見かけるとバイクを降りヘルメットを脱いでこちらへやってくる。大人の方は男性と女性で年のころはアラサー。どうやら家族のようだ。

「こんにちはー」

と声をかけられた。

「僕たちは、松江といいます。僕は豊で……」

「私は寿子といいます」

「僕はね、春人っていうんだ！ パパとママと僕のみんなで、ツーリングしてるんだ！」

と、にこにここと自己紹介をする。ヒロシも笑顔で応えて、

「こんにちは。僕は、八末広っていいいます」と自己紹介する。

ツーリングにいけば、同じバイク乗り同士で声を掛け合うこともよくある。見かけたら声をかけたくなる不思議な連帯感のようなものが、バイク乗りにはあった。

互いに自己紹介をしてから、阿蘇山の景色や互いのバイクのことで話が弾んだ。

「隣の家に、ヒロシ君くらいの子がいて、彼もバイクが好きでよく走ってたんだ」

「それを見ているうちに、楽しそうと、私たちもバイクに興味をもつようになっただね」

「僕はずっと前から好きだったよ！ 仮面ライダーにX・GAME Sよく見てたんだ！」

などなど話しをしているとき、黒いレーサーチックなマシン、GSX-R1000がやってきた。

太く勇敢そうな音を響かせ、ライダーも上から下まで黒一色で決めて、ワイルドなワルっぽい印象だった。それが、こちらにやってきて。

「ハニー」

と図太いサウンドを響かせながら、声を駆けてきた。ヘルメットを脱げば、プラチナブロードのショートにオッドアイのクールな白人女性なものだから、驚いたのなんの。

「あなたたちもツーリング？ 私は萌島麗華、よろしくね」と四人に握手を求めてくる。

てつきりベツキーとか外国人の名前が出るかと思っただが、あにはからんや、話を聞けばハーフだという。

「バイクは楽しいわね。もうこれ以上、夢中になれるものなんかないくらい」

と、萌島麗華は嬉々と語った。

なぜか松江一家は少し頬を引きつらせて緊張した笑顔になっていた。それはGSX-R1000に乗ったハーフの美人を相手にしているからだろう、とヒロシは思った。なぜそう思うのか、ヒロシがそうだからだ。

やっぱり美人を相手に話しかけられれば緊張するし、それがGSX-R1000なんかに乗っていたら、なおさらだ。

「私の故郷に草原の丘があつて。心に穢れがなければそこから天国が見えるって言い伝えがあるの。この阿蘇山も同じように、心に穢れがなければ、天国が見える場所ね」

萌島麗華は周囲を見回しながら、阿蘇山の景色を絶賛していた。松江一家も、頬を引きつらせながらも、うんうんとうなずいていた。緊張しながらも、萌島麗華の言うことには賛成だった。

「バイクに乗っているのも、そんな青空を追って、見たいからね。バイクでしか見られない青空って、あるのよね」

クールに、しみりと、萌島麗華は語った。

ふっ、と風が吹いた。と同時に、葉っぱがどこから飛んできたのか、五人の周りを風に乗る舞うようにひらりひらりと飛び交った。

萌島麗華はくすりと笑い。

松江一家は安堵した表情を見せた。

ヒロシは、なぜか、葉っぱに懐かしさを感じていた。松江一家に

萌島麗華も、初対面でない気がしていた。

葉っぱは風に乗って、空へ飛び立ち、空の青さや泳ぐ雲の景色に混ざっていった。

それを見届けると、ヒロシに松江一家に萌島麗華は互いにならずき合ってそれぞれの愛機を目覚めさせた。

マシンサウンドが草千里に響き、空を心地よく揺らすと、道に出て、火口目指してGSX-R1000を先頭にD-トラッカー、ゼロ250、Vツイン・マグナと、四台仲良く並んで走り。阿蘇山の景色のひとつになっていた。

それはツーリングでのみの、一期一会の縁かもしれないが。その一期一会の縁が、みんなを阿蘇山に呼んだのかも知れない。

ふとバックミラーをのぞけば、Vツイン・マグナのリアシートで母親にしがみつく小さなヘルメットの春人が、ヒロシに向かって手を挙げて、親指と人差し指と小指を立てていた。

ヒロシは一瞬振り向いて、同じように、左手を挙げて親指と人差し指と小指を立てて、

「さいっコー！」

とヘルメットの中で叫んだ。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8003s/>

世界樹の葉

2011年5月21日00時28分発行